

あ か
明るいまちづくりをめざして

いっしょ かんが
みんなで一緒に考えよう

だい かいぜんこくちゅうがくせいじんけんさくぶん
第43回全国中学生人権作文コンテスト

ない かく そう り だい じん しょう じゅ しょう さく ひん
内閣総理大臣賞受賞作品

わる ぐち
「悪口」

ほうむしょうじんけんようごきよく ぜんこくじんけんようごいいんれんごうかいしゅさい
法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会主催



ごう
79号

しん ぐう しん きょう いん かい
新 宮 市 教 育 委 員 会
しん ぐう し じん けん そん ちよう いん かい
新 宮 市 人 権 尊 重 委 員 会

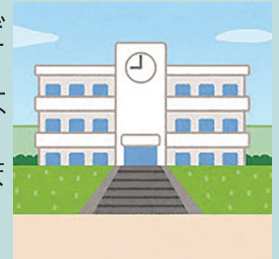
わるぐち 「悪口」

きょうと ふ かめおか し りついくしんがくえん ねん
京都府 亀岡市立育親学園 8年

寺竹 瑠音（てらたけ るね）

わるぐち い ひと きず
悪口を言って人を傷つけてしまったことがある。その時の記憶がときどき顔を出し
わたし こころ
て私の心をざわざわさせる。

その日、遊ぶ約束をして集まった友達数人と夏休みの宿題の進捗状況や、最近はまだ
お はなし はなし も あ わ だい ぶかつどう
っている推しの話など、たわいのない話で盛り上がっていた。そのうち話題は部活動
がっこう はなし うつ ひとり ともだち はなし わたし こ こま
や学校の話へと移っていき一人の友達の話になった。私もたまたまその子のことで困
っていることがあったのでつい話に乗ってしまった。始めのうちはただの相談会のよ
うな雰囲気だったのだが、その子のせいで困っていることや腹が立ったことなどを話
すうちに、みんなの気持ちが昂ってしまったのだろう、話はどんどん
わるぐち はってん わたし たい き
んエスカレートし、悪口に発展してしまった。私も、大して気にな
っていなかったことに対しても「わかるわかる。」と共感してしま
っていた。そのうちに、私たちの会話を聞いていた一人の子が、



「やめようや。」と言って私たちを止めてくれた。その瞬間、何とも言えない気まず
くうき なが わたし なに い ふ かえ とき わたし
い空気が流れ、私はしばらく何も言えなかった。振り返ってみると、この時の私には
も あ くうき こわ ふまん き も ほう つよ
盛り上がっていた空気を壊されたという不満の気持ちの方が強かったのではないかと
おも こ わたし い わるぐち ほんにん し ぶか きず
思う。その後、私たちが言ってしまった悪口が本人の知るところとなり、深く傷つけ
てしまった。「ばれなければいい。」という考えのもと無責任な発言をし、それを共有
う れんたいかん なか ま い し き じつ
することで生まれる連帯感。そんなゆがんだ仲間意識は実は「いじめ」なのだという
とき わたし き
ことにこの時の私は気づいていなかった。

集団生活の中では、日々いろんなことがある。当然自分と合わないなと感じる人も
で かんが かた ちが いけん い ちが ふ まん わるぐち
出てくるし、考え方の違いや意見が行き違うこともある。そんな不満がつい悪口とい
かたち で しょうじきだれ おも わたし
う形で出てしまうことは、正直誰にでもあるのではないかと思う。しかし、私たちが
まちが ひとり こ わるぐち こう い たの
間違っていたのは、一人の子を「ねた」にして「悪口」という行為を楽しんでしまっ

たこと。そして、もし自分が「悪口」を言われている側だったという想像力が欠けていたことだ。本人のいないところでの中傷は「いじめ」だ。

私には、その場の空気に流されて深く考えずに行動してしまう弱いところがある。私自身、過去に冷たい言葉を吐かれて傷ついた経験があるのに、「悪口」を言う自分を止めることができなかった。あの時、相手の気持ちを考えなかったこと、そして、第三者が止めてくれなかったら「悪口」はもっとエスカレートしたかもしれない——そう考えると、自分の軽率な行動がますます許せなくなる。一度吐いてしまった言葉は二度と取り消すことはできない。深く反省し、友人にも謝罪をした。友人は、謝罪を受け入れてくれたが、友人との関係は元どおりというわけにはいかず、小さなしこりが残ったままだ。

「空気を読む」という言葉がある。その場の空気を敏感に察知してうまく行動することだ。反対に「空気が読めない」ことを揶揄する言葉「K Y」という言葉も生まれた。ノリが悪かったり、場の盛り上がりに参加しなかったり、時には「正義」さえも茶化してしまう言葉だ。この言葉のせいにするつもりはないが、この「空気を読む」ということに私たちはものすごく敏感で、縛られているような気がする。「空気の読めない子と思われたくない。」そんなマイナスの感情が行動にも表れてしまっているように思うのだ。あの時、悪口を止めてくれた子は、あの瞬間、私たちの中では「K Y」だった。「せっかく盛り上がっているのに自分だけいい子ぶって…。」と。けれど、陰口を止めてくれた子にとって「やめようや。」の一言がどれだけ勇気を必要とする行動だったのかということが今ならわかるし、素直にすごいなと思う。

今年の夏休みはパリオリンピックが開かれ多くの日本人選手の活躍が連日報じられた。一方で、負けた選手の言動に対して多くの誹謗中傷がSNS上に書き込まれるというマイナス面も取り上げられた。このニュースを聞いて、なぜ頑張った選手に対して嫌な言葉を浴びせるのか。匿名であることを利用して悪意ある言葉を書き込むなんて卑怯だと腹が立った。しかし、その一方で、私がやったことも本質的にはこの人たちと同じなのではないかということにも気づいた。本人のいないところで悪口を言う、「ばれなければいい。」という点でこの卑怯な人たちと同じではないかと。

もし、あの日に戻れるとしたら「直接本人に言ったら？」という一言が言えるだろうか。あの日から一年。傷つけた友人と何のわだかまりもなく会話ができるようになるまでの時間は、私自身の弱い部分や課題と向き合う時間だと思っている。この後悔を二度と繰り返さないよう、自分の言葉には責任を持ち、相手の立場に立って考えられる人になりたいと強く思っている。

※内容は原文のまま掲載しています。

人権問題でお悩みの方は下記まで御相談下さい。

担当者が対応させていただきます。

新宮市役所人権政策課 電話 0735-23-3333（代表）（内線 3102）



作者は友人達との会話で、別の友人の「悪口」に発展してしまった時、「やめようや。」と止めてくれた友人の一言が、自分や社会を見つめ直す機会となりました。SNSを利用して匿名で悪意のある言葉を書き込むことに怒りを感じる一方で、「ばれなければいい。」と思った自分も、やっていることは同じではないかと気づいたことは、作者にとって大変貴重な経験になりました。

今日、差別などの人権侵害は SNS などを利用した匿名の書き込みによって行われています。たとえ顔は見えなくても、SNS の向こう側には同じ人間がいることを想像し、ルールやモラルを意識し、自分の言葉に責任を持った利用を心がけることが大切です。

一人ひとりが差別や誹謗中傷によって人が傷つくことのない社会を築いていくことを心がけましょう。

広げよう やさしい心と思いやり